2026 年度

大学院　臨床心理学研究科〔博士課程(前期)〕

第Ｉ期　入 学 試 験 問 題

論　文

◇試 験 時 間……１０：００～１１：００

◇解 答 時 間……６０分

◇解答はすべて別紙の解答用紙に記入すること。

◇問題は全部で 2 ページある。試験開始後、乱丁・落丁がないか確認すること。

問１．　以下の人物から二人を選び、説明しなさい。

（5 点×2）

① D.W.Winnicott　　② 土居健郎

③ H.Rorschach　　④ 河合隼雄

問２．　交通事故で亡くなった遺族への心理的なサポートについて、論じなさい。

（10 点）

問３．　心理療法において、曜日と時間を固定し、同じ場所で、同じ担当者（心理療法家）が、相談に応じることが多いが、このようにしている意味を論じなさい。

（20 点）

問４．　以下の文章のうち a から j までを、四角のなかの単語で埋めて、文章を完成させなさい。

（20 点）

1. 精神遅滞とは、以前は(　a　)と表現され、1999 年以後は、法律用語として教育・福祉領域で、知的障害という表現が用いられている。そのため現在では、合併障害や原因疾患への対応に対して、全体に遅れている医学的な用語として用いられることが多い。

子供の平均的な発達過程における主な達成項目と達成月齢、年齢を示すためには（　b　）という言葉が使われて、発達の里程表、マイルストーンと言われている。発達の程度を推察するために、例えば運動発達は、寝返り 5 か月、座位保持 6 か月、ハイハイ 9 から 10 か月といった目安ができる。

2. (　c　)の患者がしばしば示す「思考吹入」は、他人の思考が自分のものになるという病的な信念のことで、考想吹入ともいう。患者は人の考えを、自分のものとして体験してしまうので、ある意味で人のために考えているという奇妙な思考をすることになる。これは(　d　)が「一級症状」と呼んだ「思考奪取およびその他の思考干渉」の一部と考えられている。

3. 失語症でも、構音障害でもないのに、人といると話さない状態を(　e　)と言い、特定の社会状況で一貫して言葉を発さない人を選択性（　e　）と言う。話せないのは、どうしてなのかは、本人にはなかなか理解できないが、この症状はいわゆるすべての子供が発達のプロセスのなかで、八か月ごろに示す（　f　）不安状況に似ているので、対象関係によって理解できる部分が大きいのだろう。また大きくなったときの対人恐怖や引きこもりの心性と関連していると考えられている。

4. 運動の協応が必要な日常動作の能力が年齢や知能から期待される水準よりも著しく低いことが特徴とされる場合、発達障害の一部として（　g　）という障害とみなされる。運動発達の遅れや粗大、微細運動に対する不器用、スポーツや書き言葉での苦手さは、こうした障害を持つ子供の特徴とされる。

ただいわゆる落ち着きのない発達障害である(　h　)の子供たちにも、似たような症状を示す子供もいて、これが注意の問題なのか、運動協応の問題なのかは、慎重にアセスメントする必要がある。

5. 大切な人との別離、死別などの体験をした人が、その故人を思い出すような日や記念日に特有の心身症反応を起こすことを(　i　)と呼び、生前の死者に対するさまざまな情緒や記憶によって生じる対象喪失の反応とみなす。フロイトはこの状態を(　j　)との関連で考察した。彼によれば、うつ病の発症プロセスは、こうした対象喪失のなかで生じる現象が多くみられる。失われた対象が人の記憶の中で生き続けているともいえるこの現象に関して、彼は、このプロセスでは、死の受容が課題であると述べている。

人見知り　フロイト　てんかん　自閉性スペクトラム障害　緘黙　ADHD 精神機能障害　発達性協調運動障害　気分障害　メランコリー　精神薄弱　発達指標 分離離別反応　シュナイダー　病態基準　愛想笑い　クレペリン　命日反応　即日反射 統合失調症

問５．　精神医学的にうつ状態と言っても、最低三種類のうつ状態がある。このうつ状態のさまざまな在り方について、簡潔に論じなさい。

（10 点）

問６．　次の文章を読んで、各問に答えなさい。

（30 点）

人が他人に影響を及ぼすという社会的影響の研究は、メスメリズムや催眠の技法を発展させた人々に始まるといえる。医学の分野で催眠を取り上げた一人が Jean-Martin Charcot で、彼は 19 世紀後半にかけてパリのサルペトリエール病院でヒステリーの患者に催眠療法を施した。Charcot の下で催眠の研究を行っていたなかに Alfred Binet がいたが、彼は催眠だけでなく広く(1)suggestibility の研究を実験的に行っていた。

アメリカでは Norman Triplett が (2)social facilitation の実験的研究を 19 世紀末から行っていたが、Binet も Triplett も Floyd Allport が 1924 年に著した『社会心理学』以前に社会心理学的な研究を行っているところが興味深い。その後 1950 年代から 1970 年代にかけて、[　a　]の同調行動、[　b　]の認知的不協和、[　c　]の服従行動、さらに[　d　]の監獄実験など著名な研究が社会心理学の分野に加わっていった。しかし、21 世紀になると社会心理学の研究を中心に「再現性の危機」が叫ばれるようになり、心理学の研究の規範も見直されるようになった。具体的には心理統計で多用される p 値を偏重する傾向を見直し、(3)effect size について併記することを求めるようになった。

Q1　下線部(1)を日本語の用語に訳し、意味を簡潔に答えなさい。

Q2　Alfred Binet が関わった Binet 式知能検査３種（①田中ビネ―知能検査、②Stanford-Binet Intelligence Scales、③Binet-Simon Intelligence Test）を古いものから新しいものへ時間的に並べなさい。

Q3　下線部(2)の意味を簡潔に答え、日常的な一例を挙げなさい。

Q4　下線部(3)を訳し、簡単に説明しなさい。

Q5　空欄 a から d に最もあてはまる語を次の語群から選び、記号で答えなさい。

語群：

ア）Solomon Asch　イ）Stanley Milgram　ウ）Kurt Lewin

エ）Harry Harlow　オ）Jerome Bruner　カ）Leon Festinger

キ）Lewis Terman　ク）Albert Bandura　ケ）Philip Zimbardo